

SJDM The 2016 37th Annual Conference 参加報告

立教大学現代心理学研究科 瀬下 夢大

<会議の概要>

Society for Judgment and Decision Making (SJDM) は判断と意思決定に関わる研究に特化した学際的な大会である。この SJDM の年次大会である The 2016 37th Annual Conference が 2016 年 11 月 18 日から 21 日にかけて、アメリカ合衆国マサチューセッツ州のボストンにて開催された。判断や意思決定に特化するという大会の特徴のため、心理学だけでなく、経営学や経済学、工学分野の研究発表も行われていた。そして、会場はシェラトンボストンホテルが利用され、多くの研究者が参加していた。

大会初日である 18 日にレセプションと講演、懇親会が催された。19 日及び 20 日には主にポスター発表が行われ、その合間に論文発表が挿まれた。最終日である 21 日は昼頃まで論文発表が行われた。

<発表内容>

青年期において、ユーモアセンスに与える影響について検討するため、質問紙調査を実施した。

その結果、青年期において空想がユーモアに与える影響はほとんどないことが検証された。しかし一方で、空想の精度が現実の場面でのユーモアの応用力に影響を与えるということが今回の調査によって示唆された。また青年期にはユーモアを社会的な活動のために用いており、ユーモアの役割が児童期と変化している可能性が示唆された。

<聴講した発表や講演>

19 日の 10 時頃から行われた多様なギャングラーの誤謬及び、コンコルド効果を理解する枠組みとして、「心理的慣性」という概念を提唱するという内容の講演を聴講した。「心理的慣性」という概念は二つの命題から構成されている。第一の命題では、バイアスとは状況変数に対する無自



写真 1 ボストンの街並み



写真 2 大会のポスター発表会場

覚の結果であるというような内容が示されていた。第二の命題では、それぞれのバイアスは逆バイアスを有するという内容であった。ギャンプラーの誤謬とコンコルド効果について一貫した説明が可能であり、「心理的慣性」が顕在化したものであると述べられていた。

<感想>

今回の大会は私にとって初の学会参加であったこともあり、強い感銘を受けた。今回の大会では、ユーモアの研究者と出会うことはできなかったが、私の発表を聴講して下さった方々から、多様なアドバイスを受けた。それらに明確な返答を示すことができず自分自身の能力の無さを実感したが、同時に今後の研究の励みとなるような強い動機づけを得ることができたように思う。今後、学会に参加する際には、今回の発表で指摘されたような問題には明確な答えを用意するように努めたい。

また今回の出張における反省として、私のコミュニケーション能力の低さを改めて実感した。私の場合は日本でも同様であるが、英語環境ではより顕著であった。事前に用意していた原稿を発表することはそれなりに上手くできたと思うが、質疑応答において臨機応変な対応をすることができなかった。また平時においても自分の意図を伝達することが上手くいかない場面が多々あった。今後の課題として、自分自身の意見を端的にまとめて発言すること、及び実践的な英語に触れ合う機会を主体的に設けることを今後の院生生活の中で実行していきたい。

最後に余談となってしまうが、今回の出張では様々なアクシデントに見舞われた。特に初日には

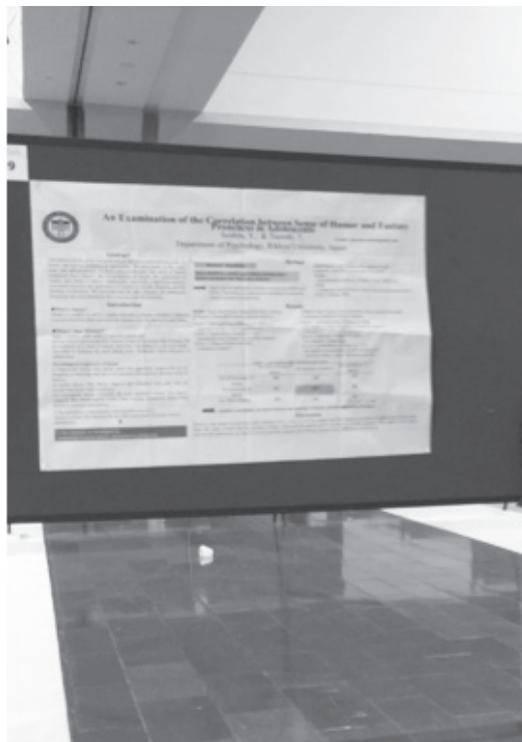


写真3 大会で発表したポスター

飛行機の機材トラブルのため、予定して便が翌日に遅延される事態となった。日本国内での遅延であったことは不幸中の幸いであったが、現地でのホテル再予約や、一部大会参加スケジュールなど、様々な予定変更を余儀なくされた。しかし遅延時間は非常に長かったとはいえ、飛行機の遅延自体は予測しうることだったので、トラブルをある程度想定しておき、事前に準備しておくことも今回の出張の教訓の一つとして、今後の生活の中で習慣づけていきたい。